太平天国(二)

■陳舜臣■

講談社

太平天国(二)
一九八二年八月一二日　第一刷発行

著　者——陳舜臣
発行者——三木章
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二一二一二一二
郵便番号——一一二
電　話——東京(〇三)九四五一一二一(大代表)
振　替——東京八一二九二〇
印刷所——豊国印刷株式会社
製本所——株式会社黒岩大光堂
定　価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。
© 陳舜臣　一九八二年

Printed in Japan. ISBN4-06-200036-9(0) (文2)

目次

琉球通信 7
われら死地を脱せり 39
江山を打つ 75
永安脱出 109
桂林の攻防 144

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

屠城のあと——178
南北往来——212
長沙の夏——238
登場人物一覧——6
地図——273・274

ブックデザイン――村山豊夫＋長谷川純子
イラストレーション――田中久司

太平天国(二)

主な登場人物

—太平天国関係—

洪秀全〈こうしゅうぜん〉太平天国の思想的柱。天王。
洪仁玕〈こうじんかん〉洪秀全のいとこ。
楊秀清〈ようしゅうせい〉東王。組織面の実力者。
馮雲山〈ひょううんざん〉洪秀全の片腕だった南王。
蕭朝貴〈しょうちょうき〉長沙の役で戦死した西王。
韋昌輝〈いしょうき〉地主で質屋も経営していた北王。
石達開〈せきたっかい〉読書人で人望も厚い翼王。
泰日綱〈しんじっこう〉後期まで活躍する幹部。
羅大綱〈らだいこう〉艇匪の首領から太平軍の勇将。
李沅発〈りげんぱつ〉天地会系流民団の首領。
洪宣嬌〈こうせんきょう〉洪秀全の妹、蕭朝貴の妻。
李新妹〈りしんまい〉天地会系流民団の大姐。
蘇三娘〈そさんじょう〉天地会系流民団の女頭目。
譚七〈たんしち〉洪秀全のボディガードで情報マン。
陳丕成〈ちんひせい〉太平天国軍末期の幹部陳玉成。
李開芳〈りかいほう〉太平天国軍の総制。
林鳳祥〈りんほうしょう〉太平天国軍の侍衛。
洪大全〈こうたいぜん〉天王の義弟を名乗る法螺吹き。

—清朝政府関係—

咸豊帝〈かんぽうてい〉一八五〇年即位。
向栄〈こうえい〉政府軍の慎重型幹部。
烏蘭泰〈ウランタイ〉政府軍の猪突猛進型幹部。
穆彰阿〈ムチャンア〉太平天国の乱発生時の軍機大臣。
賽尚阿〈サイシャンア〉太平軍討伐の最高責任者。
曾国藩〈そうこくはん〉湘軍を作りあげたエリート。
江忠源〈こうちゅうげん〉郷兵を率いて政府軍に参加。
周錫能〈しゅうしゃくのう〉太平天国への裏切者。
丁守存〈ていしゅぞん〉国軍の腐敗を伝える政府高官。

—その他—

林則徐〈りんそくじょ〉名作『阿片戦争』の主人公。
連維材〈れんいざい〉福建厦門「金順記」の主人。
連理文〈れんりぶん〉連家の四男で父の信望が厚い。
連哲文〈れんてつぶん〉理文の兄で画家、琉球在住。
西玲〈シーリン〉混血の美女、連維材の愛人。
温章〈おんしょう〉「金順記」大番頭温翰の息子。
左宗棠〈さそうとう〉與地兵法の第一人者。

琉球通信

1

沖縄島の那覇に波上というところがある。地名からも察しられるように、海のうえに岩がつき出たようになっている土地で、そこに護国寺という寺が建っていた。もとは真言宗の寺で、ながいあいだ無住であったが、五年前から妙な人物の一家がそこに住みついている。

――ベルナルド・ベッテルハイム

四十歳の宣教師。ハンガリー生まれだが、イギリス婦人と結婚し、イギリスに帰化した人物である。妻の名はエリザベス。一男一女のほかにベッテルハイムが香港から連れてきた中国人コックがいた。いや、そのほかに大きな西洋犬が二頭飼われていた。

連哲文はよくその寺へ遊びに行く。ベッテルハイムは沖縄に来る前に香港にいて、中国語をマスターしていた。連哲文のほうは英語ができるので、恰好の話し相手となったのである。

ベッテルハイムは多弁であった。たえずしゃべっている。まちに出ても、沖縄の方言で宣教活動をおこなった。語学の才能があり、那覇に来て一年もたつと、ことばに不自由しなくなった。

（おかしいな。……）

応接間になっている護国寺の方丈で、連哲文はベッテルハイムの顔をながめながらおもった。

おしゃべりのベッテルハイムが、さきほどから黙っている。客とむかい合って、十分間も黙っていたためしのない男なのだ。

連哲文は、洪秀全のかいた『原道救世歌』『原道醒世訓』『原道覚世訓』の三冊のパンフレットをたずさえて、ベッテルハイムにみせた。

ベッテルハイムは伯徳令（はくとくれい）という漢名をもっており、中国文の読み書きもできる。彼は琉球の役所に文書を提出するとき、かならず中国文でかき、末尾に、「英臣伯徳令親筆」と署名したものだった。洪秀全の著作は、一般の人にわかりやすくかかれているので、ベッテルハイムにもたやすく読めたはずである。彼はかなり時間をかけて読み、読み終えるとそれらの小冊子を机のうえに戻した。そのあと、いつものように滔々（とうとう）と論じはじめるかとおもっていると、まるで口をひらこうとしないのである。

「どう思われますか？」

連哲文に促されて、ベッテルハイムはやっと答えた。

「難しいですね。……たいそう難しい」

「文章のことですか？」

「いえ、内容です」

「わかりやすくかいているようにおもうのですが」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「難しいというのは、これがほんとうのキリスト教であるかどうか、その判断が難しいということです」

（どの点に疑わしいところがあるのですか？）

連哲文はそう訊こうとしたが、ベッテルハイムは、

「ところで、九曲先生、絵のほうはかいていただけるでしょうね」

と話題を変えた。

九曲というのは、画人としての連哲文の雅号であった。ベッテルハイムは自分の作成するキリスト教の宣伝文書に、連哲文の挿絵をいれたいとおもって、まえから頼んでいたのである。

「どのような絵をかけばよいのか、指定していただきたいのです。そうすれば、よろこんでかきましょう」

と、連哲文は答えた。

彼は画人として、長崎にしばらく滞在していた。父の連維材（れんいざい）は清国でも屈指の大貿易商で、日本とも取引関係があった。清国の対日貿易は、公式には長崎のみを窓口としている。だが、じっさいには薩摩の島津藩との密貿易がすくなくない。連維材の経営する金順記（きんじゅんき）は、とくに薩摩との関係が深かった。

島津藩の支配下にある琉球は、いわゆる両属国であった。清朝から冊封（さくほう）を受けている。琉球王は、

——汝を封じて琉球王とする。

という国書を中国からもらっていた。これは明代からそうであった。

冊封があって、はじめて朝貢が許され、それが交易関係となるのである。

琉球は中国との貿易をつづけるために、中国に服従する関係を結び、じっさいには島津に支配され

ていた。これを両属という。島津は琉球経由の中国貿易によって利益を得るために、琉球が清国から冊封を受けることを認めていた。清国から冊封使が来ると、琉球に常駐する島津の役人は、そのあいだだけそっと姿を消したものである。

薩摩・琉球を主流とする対日貿易を推進するために、連維材は四男の連理文を派遣していた。理文が一応、レールを敷いたので、三男の哲文をその後任としたのである。哲文は画家でもあるが、理文がつくりあげた人脈や縁故関係がしっかりしているので、兼業として家業に目を配るていどでよかった。

ベッテルハイムとの関係も、もとはといえば、理文からひきついだものである。哲文が知りうる洪秀全たちのうごきや、その文書なども、理文のところからきている。

哲文は辮髪を切って、当分、帰国する意思がないことを表明していた。彼はけっこう、薩摩や琉球での生活をたのしんでいたのである。長崎のある絵師は、

——南の国は絵にならない。

と言っていたが、哲文はそんなことはないとおもう。色彩や輪郭が、はっきりしすぎるというが、それはそれなりに、美しさをもっている。風景にもまして哲文が好んだのは、琉球の住民の素朴な人情であった。

両属の土地のせいか、切支丹禁制もそんなに厳重ではない。ベッテルハイムのような宣教師が、五年も前から住むことを許されている。ベッテルハイムの前にも、フランスの宣教師ホルカードという者が、短期間だが、那覇に在住していた。

ただし、宣教師は熱心すぎるほど熱心だったのに、信者を獲得することでは、成績はあまりあがら

なかった。宣教師にはかならず尾行がついたし、住民たちはベッテルハイムからパンフレットをもらっても、あとでそれを役所へ届け出たのである。役所はそれをベッテルハイムに返却した。

ベッテルハイムは、それにも懲りずに、宣教用の小冊子を配る。投げ込むようにして配布したのだ。それはまた役所に回収され、宣教師のもとに返される。ベッテルハイムはおなじことを何年もくり返していた。パンフレットは漢文のもあれば片仮名のもあった。漢文のものは、香港からもってきたが、片仮名のそれはベッテルハイムがみずから作ったものだった。それがすこしでも人びとの興味をひけるように、彼は挿絵をつけることを考えているのだ。

キリスト教布教について、こんなにまで熱心なのに、ベッテルハイムは洪秀全たちの宗教活動にたいしては、哲文が期待していたほどの反応はみせなかった。

ひょっとすると、このおしゃべり宣教師の沈黙は、とくべつ大きな反応なのかもしれない。だが、それはどうやら好意的なものとはいえなかったようだ。

「広西(カンシー)で洪秀全たちが説いているのは、ほんとうのキリスト教ではないとおっしゃるのですか？　ヨーロッパ人の説くものだけがほんもので、中国人のはそうじゃない。キリスト教を説くことができるのは、ヨーロッパ人だけということですか？」

ベッテルハイムは話題を変えたが、哲文は食いさがった。ベッテルハイムは当惑したような表情をみせた。

「そういうわけじゃありません。ただこれらのパンフレットを読みますと、あまりにも……そうですな、あまりにも儒教色が濃いようにおもわれますのでね」

宣教師は慎重に答えた。

「儒教は長いあいだ、中国の学問の正統でした。中国のことばのなかに、それはしみこんでいます。だから、中国語で説けば、多少、儒教色は出るでしょう。けれども、洪秀全たちは孔子廟をこわしたり、孔子の位牌を焼いたりしているそうです」

「その情報は正しいでしょうかね？」

ベッテルハイムは首をかしげた。洪秀全の拝上帝会についての情報は、香港にさえおぼろげにしか伝わっていなかった。この遠い琉球ではなおさらのことであろう。

「正しいものです。まちがいありません。なにせ理文が送ってきたのですからね。理文はいま広西にいるのですよ」

ベッテルハイム夫人が、そのとき茶をはこんできた。

2

連維材はすでに還暦をすぎた。咸豊元年（一八五一）、かぞえで六十三歳になった。

林則徐の葬儀に、連維材は福州の侯官（こうかん）へ行ったあと、いったん上海へ出た。そして、広西から来た西玲（シーリン）を伴って北京へ行く予定であったが、厦門（アモイ）に急用ができたので、単身、海路で南に戻った。

厦門城の東郊にあった連家の別荘「鴻園」は、アヘン戦争の最中に焼失したが、ほぼおなじ規模のものが再建されている。だが、その一ばん高いところにあった「望潮山房」は、その名を鼓浪嶼（コロンス）に新しく建てた家に移された。厦門城の海をへだてた西にある小島が鼓浪嶼である。連維材はおもにそこに寝泊りした。

陰暦四月にはいっていた。亜熱帯の厦門はもう夏めいている。

連維材は福州の琉球館から転送されてきた哲文の手紙をひろげた。

琉球にとって、対清国貿易の窓口は福州であった。そんなわけで、福州には琉球国の出張事務所があり、そこは「琉球館」と呼ばれている。琉球の出先機関だが、薩摩の息がかかっていたのはいうまでもない。

徳川幕府の鎖国政策によって、日本はながいあいだ外国とのつながりを失っていた。長崎だけが唯一の窓だったのである。だが、薩摩だけは、清国の福州に「琉球館」という触角をもっていたことになる。

清国から冊封使をのせて琉球にむかう、いわゆる「冠船」は、福州から出ることになっていた。交易船も那覇と福州のあいだを往復したのである。連哲文が父に出した手紙も、まず福州の琉球館に送られたのだ。

連維材は三男からの手紙を、誰の手紙よりもたのしみにしていた。連維材は日本に関心をもち、日本の事情を知りたがっていた。三男の哲文は、琉球や薩摩を通じて日本事情を報告してきたが、それは絵入りであったので、よけいたのしかった。

「日本のうごきは、はげしくなってきたようだな。……」

読みながら、連維材はひとりごち、やがて硯盒をあけ、墨を磨りはじめた。手をうごかしていると、心がすこしはしずまる。哲文の送ってきた手紙を読むと、心を揺りうごかされる箇所があった。

そこには時代の先端を行く人の、哀しい運命が語られていたのである。

日本で「蛮社の獄」がおこったのは、十年以上も前のことであった。一八三九年というから、アヘ

ン戦争の直前である。その二年前、大阪でおこった大塩平八郎の乱にショックを受けた幕府当局は、蘭学者や知識人にたいして神経をとがらせていた。たまたま鳥居耀蔵という、エキセントリックな反蘭学者がいて、渡辺崋山、高野長英、小関三英たちにでっちあげの罪をかぶせて検挙したのである。小関三英は自殺し、崋山も捕えられて蟄居中に自殺した。

高野長英は獄中生活五年目に、獄舎の火事によって解き放たれた。もちろん鎮火後に戻ってこなければならないのである。だが、長英はそのまま潜行をつづけた。お尋ね者となっても、生きつづけて、やらねばならぬことが多かったのだ。

――おれがやらねば誰がやる。

長英のそんな気持が、連維材にはよくわかったのである。

四男の理文が日本にいたころ、高野長英潜行についての、くわしい報告を送ってきたことがある。連維材はこの隣国の先覚者の無事をひそかに祈っていた。

だが、高野長英は去年、劇薬で顔面を焼いて変装するという苦心もむなしく、十月、幕吏に青山百人町の家に踏みこまれ、もはやこれまでと自害してはてたというのである。四十七歳だから、まだまだこれからという才能であったのだ。

高野長英は自害したが、彼のようなヨーロッパの学問をした人材が、ますます必要だということが、日本でもわかりはじめた。外国の船や軍艦が、しきりに日本の沿岸に近づいてくる。イギリスの軍艦マリーナ号が、堂々と東京港を測量したのは二年前のことであった。

去年、長崎にはいったオランダの商船は、風説書を提出して、アメリカが日本と通商をひらく意思があることを告げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.